
World End TinkerBell - 世界を忘れたティンカーベルの唄声は -

さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World End Tinker Bell - 世界を忘れたテ

インカーベルの唄声は -

【Zコード】

N3474X

【作者名】

さくら

【あらすじ】

（ 強い者にこそ、勝利は訪れる。勝ちなさい、勝つ事こそが正義。それで貴方の願いは叶うの ）

選び抜かれた魔族達『強者』の集う島。最終地点、『失われし理想郷』。弱者には決して微笑まない、皮肉な勝利の女神が微笑むのは、強者のみ。そして強者達は、自分の人生を掛けて遊戯を始める。たった一つの願いを叶えたいが為に、他の魔族達『強者』を倒し、殺し合い、脱落させる。何時自分が死ぬかも分からぬ。世界を自分

の思つがままに統一させたい、世界の永遠の平和を願つ、死んだ人間を生き返らせたい、過去をやり直したい、自分自身の不老不死、失つたものを再生・再現したい。沢山の願いがある中、自分の一つの願いを叶える為に全てを棄てる事が出来るのか
？
ノーヴム・テスマントウム
新約聖書、別名、絶対願望機。アブソリュート・ディザイア
ノーヴム・テスマントウム
この新約聖書を巡つて、選ばれた魔族達が殺しあう。

残酷であつてそれで一粒の綺麗な涙の流れる、一つの悲しい物語。

クリックして頂き、有難うござります。

初めての方は、下記をお読み下さい。

超自己満足一次創作小説。この小説は非公式です。ゲーム会社の方々、及び編集者の方々とは一切関係ありません。

基本、当たり前ですが、荒らし、無断転勤、中傷等などはお控え下さい。見つけ次第厳しく対処。・超絶スルー致しますのでご注意を。また、無断転勤なんてする価値も無いですけど。

駄文なんて承知の上ですが、私の心にグザツ！！！と来る様な発言はお控え下さい。引き籠もつて3日間出られなくなります。

その他、私が物凄く飽きっぽい為、何時投げ出すとも分かったもんじゃないかもしれません。余談、私は他の小説投稿サイトで活動しております。そちらへ向かう事も多いと思いますので、来れない事が多いと思います。

3、4ヶ月。私が顔を出さなかつたら、飽きた、諦めた、入院、事故った、死んだ、など勝手にお思いになつて、貴方様の心の奥にしまつておいて下さい。そして時々は思い出してやって下さいね。

この小説は、現在力キコで書いているものをこじらひりゅうした物です。

ですので、力キコで集めたオリジナルキャラクターが勝手に出てく
る事があります。ご了承下さい。

用語説明

『ウォリアーテイル』

“魔法”の力に満ち溢れた、沢山の人々や魔族、魔物や妖精、魔女や神などが暮らす星。世界のよつたもの。この物語の舞台となる。

『失われし理想郷』

“第43次魔聖大戦”、最終地点。“最後の戦い”の舞台となる島。幻島とも呼ばれる。本来の島名は、リヴィリア。本来は自然豊かな島で、面積は結構広く、魔族も暮らしていたが、突如姿を消した。以来、5・6年毎（丁度“魔聖大戦”的時期）に姿を現し、消える、幻の島となってしまった。

最終地点会場に選ばれるだけ伊達ではなく、“魔聖大戦”にあつた島風となっている。

『魔聖大戦』

新約聖書、別名、絶対願望機といつ“聖書”を巡つての戦争。戦い。今回で43回目となる。5・6年に一度あり、選ばれた魔族が自分の願いを胸に生死を棒に振り、武器を取る。この世界ならではの大イベント。

『使い魔』

この世界の魔族、人間の超上級者にしか宿らない、魔物や精霊、動物などの事。

殆どの使い魔は、3頭身であり、言葉を話すことが出来る。自分の意思で、姿を消したり現したり、或いは変身したりするが、殆どの“使い魔”の状態で、人と接したり出来るよう、姿を現している。使い魔の名前の通り、術者自ら行うまでもない些細な用事を代行する。代表的な用途としては伝言、届け物、留守番、偵察、戦闘等がある。

使い魔のパートナーは、使い魔自身が自ら選ぶ。

『パートナー』

使い魔と主人の事を指す。

使い魔と契約をした者の事を“主人”といい、殆どパートナーは共に行動する。

契約を撤回する場合は、使い魔が死んだ（消滅した）時、使い魔と主人のお互いが撤回を希望した時などがあるが、お互いが撤回を希望した場合、契約書に署名、印を押して管理所に持つていかないといけない。

『狭間の門』

“現実世界”や“架空世界”、“鏡面世界”など、数々の“世界”がある中、その“世界”を繋いでいる扉の事。

7兆分の1の確立で、特別に許可を得た者しか門を通過する事が出来ず、普通の人間、魔族は見ることさえも許されない。

「実在するが実在しない」と言われている。
扉の脇には、“門番”が立つており、不正行為などを取り締まっている。

門の向こう側には様々な世界が繋がっている為、犯罪者などを送る監獄とも繋がっている為、別名「大監獄の入口」とも言われている。“魔聖大戦”、“新約聖書”を結ぶ大事な役割を保つ。この二つと、重大な関係がある。

《魔石》

ウォリアーテイル に存在する魔獣を封印した石の事。
ただし、封印出来るのは、A～SSランクまでの魔物であり、それ
より下、上の魔物は封印出来ない。主に戦闘などに駆り出される。
魔石に封印されると、黒い魔石の表面上に、ランクとその魔獣の絵、
名前が金色文字で浮き出でくる。

《幻石》

“魔石”とは違い、ウォリアーテイル に住む魔族誰もが持つて
いる。魔石は普通漆黒の色だが、幻石は色取り取りの色、模様があ
り、同じ物は一つとして無い。幻石にはその魔族の名前、職業、年
や経験値など、色々な情報がプログラムされており ウォリアーテ
イル に住む魔族達にとつては欠かせない物。

装備法は様々。アーリングにしたり、髪飾りにしたり、ネックレス
にしたり、“ラミティ”と呼ばれる鑑に埋め込み、何時でも自分の
好きなときに情報を見る事も出来る。勿論、幻石を装備せずにその
まま持ち歩く魔族だつている。

幻石の情報は、疲労などを回復する施設でしか見られないが、“ラ
ミティ”を使用すると関係なく何時でも見れるようになる。“ラミ
ティ”は上級魔族が多く持つていることが多い。

((時期更新予定))

登場人物

主人公

七瀬虹彩／コイロ・シーウェル「NanaseKoirō」
“虹桜女帝”や“戦場の墮天使”などと呼ばれる、《ウォリアーテイル》1の魔術師。

魔術師なので当然魔術も使えるが、武術や剣術などの体術の実力も相当のもの。

昔、ある重大な禁忌を犯した事があるが、何故か裁かれておらず、《狭間の門》と深い関わりが出来た。どんな関わりなのかは不明。

帝国のやり方の隅から隅まで従つてるので、一部の魔族達からは余り良く思われていない。

準主人公

サクラ・カーライト／清野サクラ「SeinoSakura」

“神桜”や“龍ノ姫”と呼ばれる実力ある魔術師。公式では虹彩の師匠にあたるが、この物語は虹彩との面識もない。

帝国のやり方に酷く反対しており、その帝国のやり方に従つている虹彩を余り良く思っていない。

フィディオと恋愛関係にある。

ジュリア・クラウン／優峰樹理亜「YumineJuria」

主にサクラと行動している名の高き実力者。魔術師である。

ジユリアも帝国のやり方に酷く反対しているが、サクラとは違い、虹彩と国王の間に何があると嗅ぎ付け、サクラと共に密かに調べ始める。

ジユリアも、虹彩と同じ“世界貴族”の跡取り娘である。マークと恋愛関係にある。

シールア「虹女神アルカンシール」

虹彩の優秀な使い魔。

あまり戦闘は得意では無いが、戦闘に出すと驚く程の実力を發揮する。

だが本人が嫌がる為、本当に必要なときしか出ない。

咲夜梓美「Sakiyoizumi」

虹彩の親友。

見事なまでの針の使い手であり、喧嘩などに長けている少女。余り人に心を開けていない中、初めて虹彩という部外者に心を許した。

皆様のオリキヤラ纏め（（臨時更新有り））

【安藤みゆ「AndouMiyu」】→風風←

まれに喧嘩を売っている。

少しばかり毒舌。

「私そう言つの大嫌い」

蘭桜美紗「Ranou Misā」

何処までも自由人でマイペース。
最近流行の僕っ子に分類される。
「五月蠅い・・・昼寝の邪魔」

ティアラ・クラリス「TiaraKurarisu」>刹那<
明るく天真爛漫で誰とでも直ぐに仲良くなれる。

虹彩と同様、“世界貴族”的令嬢であり、一つの国の姫でもある。因みに、その国の姫は二人居て、その片割れ。

「私達に喧嘩売ってるの？悪いけど、私とティアは最強だよ？だつて、一度も負けた事ないんだもん！」

ラティア・クラリス「LatiaKurarisu」

クールで毒舌。常に人を見下している。

虹彩と同様、“世界貴族”的令嬢であり、一つの国の姫でもある。因みに、その国の姫は二人居て、その片割れ。

「あの世へ行く覚悟があつて私達に喧嘩を売ったのよね？冗談抜きで死ぬわよ？」

時空未来「TokisoraMira」>月影<

何事にも無表情、鬼畜・冷酷・毒舌の三拍子。上下関係や人間関係を気にしていない。

刀（2本）で、ツツ「ミミが刺したり斬つたり殴つたりする。誰であろうが殴る。

実際の実力は相当なものだが、何故か表の世界で名の挙がらない。

虹彩の事を「面白くない」、「つまらない」と評する。何故かは分からぬ。

「あーあ、強い奴等ばつかだな。この世界つて。お陰で危険人物扱いされる訳だ」

時空過去「TokisoraKako」

何時も笑顔を絶やさないドM。良く言つと温厚、穏やか（と言える）。そしてシスコン。

未来の姉。但し、性格が残念。

力は世界に知れ渡つても可笑しくない筈なのだが、誰も時空姉妹の事を知らない、時空姉妹の姉。

虹彩の事を「可愛いがそこまで色氣は無い」と言つ。因みにバストは虹彩よりも一回り大きい。

「私に治せない病や傷はあるのかつて？心の傷以外は今まで全部完治なのだけれど？」

ジユリア・クラウン／優峰樹理亜「YurineUraia」

♪薔薇結晶♪

主にサクラと行動している名の高き実力者。魔術師である。

ジユリアも帝国のやり方に酷く反対しているが、サクラとは違い、虹彩と国王の間に何かあると嗅ぎ付け、サクラと共に密かに調べ始める。

ジユリアも、虹彩と同じ“世界貴族”の跡取り娘である。マークと恋愛関係にある。

「いくら綺麗で、神秘的で、麗しい薔薇でも、棘が多過ぎたのなら残念なものよね。そう、貴女の様に？虹彩、」

水無月星夢「Minaduki Seimu」

俺口調で態度デカい。でも結構優しかったりする。

有名ブランド（武器屋）“朧月夜”的店長。

有名な超高級ブランドだが、完成度が非常に高く、魔人達に人気である。

「俺はお前なんかの為に武器は造らない。造る氣すら無い。・
・それが答えだ」

咲夜梓美「Sakiyoi A zumi」

後に虹彩の親友となる人物。

今はまだお互い顔も合わせていない。

「あア」の針か？ 実は自分でも何本あるのかさっぱりなんだよ

マナ・エンディエル「Mana Endieru」

不滅の無限人格者。

王都に使える魔女。といつても、あまり魔法は使わない。

攻撃されたら“完全反発”で対抗する為、ある意味無敵と言える。

「嘘を否定すれば真実。真実を否定すれば嘘。黒を否定すれば白。白を否定すれば黒。全ては反対関係にある。」

藍原日奈乃「Aihara Hinano」→星兎く

温和でおっとり、正しキレると超怖い。家庭的。

敬語口調で、余り戦闘派では無いが、「癒」事に関しては天性。（eyesから引用）

「ああ、・・・起きられましたか？ 酷い怪我でしたが、全て塞いで置きましたので、後は充分に休んで下さいね？」

神原結祈「Kanbara Yuki」>風梨<

面倒な事が大嫌いな消極的自由人。そして黒く、計算高い。
二人目の僕つ子。

「めんどくさい事は嫌いだよ。でもおもしろそつなら話は別かな。
」

((臨時更新))

A・べるのピタノのボルシと子猫を

序章

ep01

ムンムンと立ち籠る熱氣の中、一人の少女と少年の影が生えていた。

此處は ウオリアーテイル 南方、 ウオリアーテイル 1大きな山（火山）がある、火山の麓の小さい村“ボルケイノヴィレッジ”である。今だ活動中の火山の所為で、村全体にそれなりの熱氣が立つていて、二人が使っているこの道場は“ボルケイノヴィレッジ”の中でも決まって暑かつた。

何故この二人が貸し切りの様に使い果たしているのかと訊うと、その答えはとても簡単なものだつた。この施設はあの世界貴族、シーウェル家が作らせた施設だからだ。そして、この二人も、シーウェル家の血を引く、将来後継者になる“かも”しれない者達だからだ。何故“かも”なのは、同じく世界貴族、七瀬家の血も受け継いでいるからだと言える。実際的には七瀬家の血の方が3割増し位多いが。

『違つてんでしょう！？？何度私に言わせる気なの！？』

「…ツ、はいツ！…」

『もつと脇を締める。動きがトロイ、温い、遅い。パンチやキックに張りが無い。隙をつかれた時の対応があと少し出来てないっ！！』

さつきから自分が相手役をしながら教えている少女と少女にしてんぱんに扱かれている少年は、どうやら空手をしているようだ。

ちよいと今からこの二人の事を説明するとするか。

まず、少女。この少女の名前は“七瀬虹彩”。または“コイロ・シーウェル”。17歳の（オノナ）だ。さつきの会話だけ聞くと、物凄い厳しいスバルタな性格に思われるが、根は優しく、明るくて家庭的な少女だ。だが、若干ツンデレっぽい性質なので、いや、関係無いかもしませんが先程のような厳しくて立派な氣も入っている感じもある。まるでお姉様の様な性格だ。そしてブラコン。

容姿は、しなやかでふわふわとした腰まである蜂蜜色の髪の毛に、澄んだ宝石の様に輝く淡いピンクローズ色の瞳。その瞳を縁どる長い睫毛にシャープな眉毛。頬は薄ら桃色に染まっており、道着の上からでも分かる、モテル並みの傾らかなラインのボディ。そして胸がデカい。まさに男のロマンだ。手足はスラリと細長く、手の指の先まで綺麗。身長は性格の割には高くない。だがチビでもない。神童や霧野より少しばかり小さい位だ。だがやはり性格は性格。虹彩には誰も頭が上がらない。

虹彩はこう見えて、いや、これだから、あの有数な世界貴族の“七瀬家”と“シーウェル家”的血を引いている為、彼女は莫大な権力を持っている事になる。

文武両道、智力は魔族の範囲を越えており、運動も以下同文。戦闘

系は、この年で数々の道場の師になる程の武術、剣術、魔術などの実力がある。ウォリアーテイル 最強だと言われている。まあ、それ位強いんだ。俺も、コイツにだけは頭が上がりねえ。歯向かうと消される可能性が猛大にあるからな。

4才の頃、まだ魔術を覚えていない時だ。1本の刀と銃、それだけでSランクの魔獣を倒した、という経験がある。それもたったの20秒で、しかも掠り傷一つだけで、大した怪我は無いし、この子は強い！！いや、強いでは済まない位だぞ！！流石我が子だア！！とか何とか言って自慢する虹彩の馬鹿親父を思い出した。

更に、虹彩は知や術だけじゃない。最年少奏者、優秀な歌姫でもある。ヴァイオリン、サックス、フルートを主に持参している。あ、普通に持つてるんじゃないぞ。“ラミティ”にデータをプログラムしているから必要なときに取り出せる事になっている。“ラミティ”にはその他様々な便利機能もあるから、本編を見逃すんじゃないぞ！

かなり長くなつたが、少年の説明に移る。この少年の名前は“七瀬日向”。又の名を“ヒナタ・シーウェル”という。10歳の（才トコ）である。まあ、何だ。虹彩の実の弟だ。優しくて、可愛い物が大好きな少しご女チックな男の子だ。でもしつかりしていくやる時はやるし、他人を思いやることが出来るので女子にモテたりする。つ糞、羨ましいぜ。

そしてかなり極度のブラコンである。

虹彩と同じ蜂蜜色の特徴的な髪型に、輝くアクアマリン色の瞳。10歳になつて、背は伸びたが同じ年齢の子達と比べると一回り小さい。瞳が大きく女顔なので、最近は女装して街に遊びに行つたりも

“たまに”する。

だが、すばしつこく、空手と柔道などの武術の腕は中々であり、虹彩が師を務める道場でも、かなりレベルが高いのにその中でも一番強い選手らしい。だが虹彩に勝った事は一度、いや、これからも無い事だろう。

「おーい虹彩！お前其処までこじとこでやれよなー」

『・・・・ギル、・・・・・よし、今日は此処までーーー』

「つ、疲れたあーーー！」

おっと、紹介が遅れたな、俺の名前はギルバット。気軽にギルと読んでくれ。虹彩の馬鹿親父・・・俺の主人、“七瀬優輝”的使い魔だ。因みに、生体は尻尾が二又に分かれている黒猫の姿だ。コイツ等の面倒見係だ。虹彩には立派な使い魔ちゃんが居るのに何故俺が、話は変わるが、俺の事もつと知りたいだろ。・・・そんなに言つなら教えてやるよ！俺はな、もう、本当にモテモテのモツテモテで、彼女居ない歴0年。今日も12匹に告られ、全員フツってきたのである。何故なら俺には大切な彼女がいーーー（￣＼）

『日向、今日は調子良いみたいね！昨日よりずっと動きも素早かつたし、威力もあった』

「本当に良かつた。でも姉ちゃんは超えられないよ。」

『そんな初っ端から弱氣だから本当に追い越せないのー。アンタは実力は十分過ぎる程あるんだから、もつと自信を持ちなさいー。』

「でもやーー」

丁度その時、大きな音が俺達の耳を襲った。

村からだ。

何だ何だ、と立ち上がりつつとした虹彩。その瞬間、道場の扉が急に開いた。

「虹彩さんつーー、ギルバットさんつーー」

A・べるのピターノのフルシと子猫を（後書き）

231007 20:18

さあて、始まりましたw

最初の目次は親友のパクリました（）

B・エスケープの魔法

序章

02

「虹彩さんつ！…ギルバットさんつ！…大変なんです！…！」

…、村が

「…！」

『…は？』

私が師を務める道場に現れたのは、私の使い魔“虹女神アルカンシエル”。通称“シエルア”。

そして、彼女の突然の思いもよらない発言に、頭が回らなくなつた。

「兎に角、大変なんです！村が、襲われているん・・・虹彩さんつ！」

『ギル、田向を此処（道場）から出ないように見てなさい。シエルア、案内して』

シエルアの説明よりも早く、私の身体は動いた。

ギルに田向を見ていると、シエルアに其処までの案内をお願いすると、シエルアが私の手を掴んだ。

私の腕を両腕で必死に抱えると、いつもは聞かない、真剣な声で私は叫ぶ。その声は本当に必死で、私の腕を抱える腕にも、徐々に強さが増していく。

「！」虹彩さん、駄目です！！私は虹彩さん達を逃がそうとして・・・。
・。駄目です！！行つては！」

『黙りなさい！！私が案内してと言つてはいるの！もしそれでも案内しないと叫うのなら、私はお前の手を振り払つてでも、案内無しに村へ行くわ！』

するとシェルアは、諦めたのか、瞳に滲んだ涙を浮かばせ「はい。
。。」と言いながら私を案内し始めた。

シエルアに案内されながら、村の中心部へと急ぐ。

此処“ボルケイノヴィレッジ”にある道場と、住居などがある中心部の距離は、何故か相当なまでの距離がある。しかも、その間に川が流れしており、小さな村、と言つても道場までを合わせると相当な大きさの村になるのだ。

道の所々に火山岩や瓦礫も落ちていて、酷くやられているんだと実感する。

そして、息を切らしながらやつとの事で着くと、其処には眼を疑つ様な光景が広がっていた。

破壊された家、燃えている木々、その下に倒れている人々、そして、普段は群れで生活しないのに、異常なまでの数のモンスター、『マハー・ヴァイロ』と『ジュー・ヴァイロ』。その真ん中に居る、黒に近い深緑色のローブを被つた、魔女。

幼い子どもから老人まで、悲惨な状態で死んでいる皆。其処には、私の道場へ通っていた子ども達まで居る。

「お、お姉ちゃん！－虹彩お姉ちゃん！」

『・・・・・ルマッ－！？』

「助け・・・・・、シ、」

バタツ、

「助けて」そう言おうとしたのか、最後の一人、隠れていた少女、ルマは私を見つけ近づこうと身体を見せた瞬間、背後から刃物の様な物が飛んできて、背中を貫かれた。

咄嗟にルマが倒れた後に背後を見ると、其処には《ジュー・ヴァイロ》が牙を光させていた。その《ジュー・ヴァイロ》の抜けた牙は忽ち新しい牙が生え、埋まった。

さつき、ルマを貫いた刃物のよつな物、それは《ジュー・ヴァイロ》の牙だったのだ。

そして、その目が私を捉えると、戦闘態勢に入る・・・と思い、構えようとしたが、一頃に攻撃してくる様子が無い事に目を見開いていると、其処にシエルアが到着した。

「ハア、ハア、・・・。間に、合いませんでしたか・・・。私が気づいた時にはまだ数名・・・」

『・・・もう、数名どころか一人も、残ってないわ。最後の一人も、さつき私の目の前で、殺された、』

「えつ！？」

何故このモンスター達は、私達に警戒しないのか。攻撃してこないのか。『マハー・ヴァイロ』、『ジユティー・ヴァイロ』の“ヴァイロ系”はとても警戒心が強く、他のモンスターや魔人達を捉えると、攻撃してくる事で有名なモンスターだ。なのに、何故私達には何も攻撃してこないのか。

これは何か可笑しい。普段群れで行動しないのに、異常な数のモンスターがこの狭い村に集まり、村を襲っている事。そして、急に村に飛び込んできた私達に警戒しておらず、攻撃をしてこない事。

すると、中心に居た魔術師の女と、田が合つた。

その女は、私と田が合つなり、ニタリと嫌な笑みを浮かべるや否や、深緑のローブの中から剣を取り出し、攻撃を仕掛けに来た。

『（あ、あの剣！“紅月”！）』

「はアツ！－」

剣を振り上げる魔女を、軽く交わし、腰に手を当てる。するとアクリシテントが起じた。

今来ているのは道着＝武器をもつてない。

何時も持ち歩いている拳銃と刀は道場に置いてきた。ならば楽器をと思うがそれも駄目。“ラミティ”も同時に道場に置いてきたのだ。

こうなると、極限的に不利な状況になる。

次々と襲ってくる剣を交わしながら考えて來たので、ギリギリで交わすほどまで動きが鈍くなっていた。

その時、“紅月”は私の腕を掠つた。鮮血が少し飛び散る。それを見るなり、魔女がさつきの嫌な笑みを浮かべた。

だが、武器が無いからと言つて私が負けるような事は無い。

剣術や楽器が無くても、武術は仕える。それに魔法を組み合わせれば、かなりの戦力になる。

卷之三

・・・・・ツ!

交わしてきた衝動で、回し蹴りを出す。見事命中し、魔女と距離を置く。

一瞬で身体に魔力を貯め、一気に駆け出す。

『咲武術“火炎桜”！！！』

「うあッ！－！－！」

燃える桜、火を纏いながら落ちて来る花弁の様に、連射した蹴りと

パンチが魔女を捉える。

魔女は突き飛ばされ、“紅月”が私の近くに落ち刺さつた。

そつと“紅月”を地から抜くと、同時に鞘が私の方に投げられてきた。

「お見事です。“虹桜女帝”、“戦場の墮天使”七瀬虹彩。」

『何で、私の名前、』

「必然的にですよ」

『いや答えになつてねーよ』

「あらあら、たまに口が悪くなるのは変わりませんね」

“どう言つ意味?”と問い合わせると、“忘れて下さい”と答える魔女。

私、あの魔女にあつたことあるのか?

だが、覚えてないので、余り深い意味は無いのだろう。

「それでは、帰るとしますか」

『ま、待ちなさい……』の村は、貴女がやったの……』

「……私であって、私で無い」

魔女が小さく呟いた言葉は、消えるだけに、私の耳にはっきりと
残った。

「『Transfer』……」

ショニック

魔女と村を襲っていたモンスターが一瞬にして消えると、残された
のは、私とシエルア、『紅月』。それと今日、地図から消えた小さ
き村の残骸であった。

B・エスケープの魔法（後書き）

231007 20:20

只今猛コピ中です w
カキコのりゅわ

C・オペラの理不<勿>～悲喜劇ロブレット～

序章

03

あの後、私はこれ以上村の残骸を見て居たくなくて、黙つて道場に帰つた。

『日向。貴方は、私と一緒に家に帰ろつか』

「え、村の方は?」

『大丈夫。大丈夫だから、ね?』

「・・・うん、」

『シエルア。私、確認したい事があるの、』

「分かつてます。でも、何で急に・・・、」

『・・・あの魔女、層移動する時に、胸元の刺繡が見えた』

「…………おやかッ！？？」

『…………あれは、王都の、国家のマークが刺繡されたわ、』

「な、な、國が？」

『…………國が、關係してゐるところの事』

衝撃の事実に、田を丸くするシユルア。

私だつて、声が震えている。

まさかあの魔女が、國家の軍の魔女だとしたら、上からの命令で村を地図上から消した、としても充分に考えられる。

此處は一旦、帰つて色々と調べてみる他無いだらう。

「では、今すぐに？」

『いいへ。…………まだ、やる事があるんぢゃない？』

「…………はい！」

日向に、いの現実を見せるのはまだ早い。

なので、ギルに事情を話し、日向を見てもらつ事になった。

私とシエルアは、また村へ戻る。

やはり、変わらない悲惨な姿の村。

普通の、一般的の魔族なら、激しく嘔吐を繰り返すであろう、この状態に村に私が一切反応を示さないのは、一つだけ理由がある。

こうこう状況に、慣れているから、である。

理由はまだ伏せておく。

私はパツ、と右手を肩まで上げた。

一瞬で魔方陣を展開する。

それは、蒼い、魔方陣だった。

眼を瞑る。

『宝水の精靈 アモルフィス・フェアリーズ を召還！！』

腕を魔方陣に付け、上、下、右、左、斜め、上と動かす。

すると、蒼い魔方陣を素早く閉じ、中から出て来たであろう精靈達に告げる。

『辺りの火を消しなさい』

*

それから、アモルフィス・フェアリーズ 達が消した火を見る。
この精靈達にとつては、火消しなど、魔法無しで出来る技である。
たつたの3・5秒で辺りの火は水の前で消えた。

そして、こう告げる。

『さて、火も消えた事だし、瓦礫を魔法で動かして、皆の墓を作る
わよー!ー』

「はいー」

私は、指で瓦礫を退かし、消滅させてゆく。

シエルアは、動かなくなつた村の人達が入る穴を、掘つている。

先程召還した アモルフィス・フェアリーズ 達も、手伝いたいと言つて來たが為、手伝つてもらう事にし、手分けして墓を掘つたり、瓦礫をどけたり残りの作業をして貢つた。

そして、皆で村の人達を墓に入れ、見送つた。

墓作りは、魔法ではやりたくない。それが私の考えだつた。

魔法には頼りたくなかった。

自分の手で、見送つてやりたかった。

近くに居ながら、助けてやる事すら出来なかつた自分の無力さに、無性に腹が立ち、涙が一粒、私の腕に毀れた。

* * * * *

○・オペラの煙草机～禁煙にハッカ～（後書き）

231007 20:23

D・あなたなしでも世界は廻る

04

『こんな終わり方って、あるの・・・?』

最後の一人を埋め終えると、召喚した妖精達を召還する。

そして、私とシエルアは、小さいながらも、何時も活氣で満ち溢れていたあの村を見ていた。

其処には、もうその活氣は残つて居なかつた。

あるのは、地面上に並べられた墓だけ。

「皆さん、良い人でした、」

『ええ。・・・皆の為にも、何でこのよつた事が起つたのか。調べないといけないわね、』

「・・・はい、」

この村を一瞬で消したあの魔女には、王都のシンボルマークが刺繡されていた。

この事件には、王都、いや、この国が関わっているようだ。

この国は、この星の中でも頂点に達する国、中心部の大都市である。勿論、人口も多く、政治も安定している。

こんな国が関わっている、としたら、一筋縄ではいかない。

それに、この国も、隣国や他の様々な国と同盟を結んでいる為、下手に動き回ると危ない。

調べる、にしたって、そう簡単にはいかないのだ。

『・・・でも、必ず真相を暴きだしてみせる。・・・この国は、少し前から可笑しいと思っていたのよ。最近何人もの失踪者が出ているというし、この村の他にも地図から消えた地域は多数あるわ。他にも、最近見た事も無い様な怪物、いや、人型・・・欲に言づゾンビの様な、怪物を見かけたっていう事例もあるみたい。

・・・だけど、それ等全ての事例、内部で管理して、表には出でないみたいよ。』

「・・・え、内部、とは・・・？」

『王都国家の内部よ。軍上層部で処理しているのよ。失踪者は只の事故や事件として片付けられていたりとか。』

「」、虹彩さん、何処でそんな情報を・・・？」

『ふふ、王都国家の軍上層部よ？』

「・・・・・あ、もう、でした、ね・・・、」

何故私は軍の上層部と関わりがあるのか、といつと。

私も、嫌々ながら一応は王都に使える魔女だからだ。

何故なのかは、今語るにはまだ早すぎるの、伏せておいた。

「・・・では、どうやって、調べるのですか・・・？」

『まず、家に帰るわ。父さんが、何か知ってるかもしねい、』

「そうですね、」

『日向ー。居るー?』

「姉ちゃんー!」

『家に帰るわよ。』

日向とギルが居るのを確認して、私は虹色に黒の桜の模様の羽、日向は白に太陽の光が書いてある羽を瞬間に取り出し、魔方陣を開する。因みに、使い魔は自分で羽が無くても層移動はお手の物。

これが、層移動の仕方。

層移動の魔法にも、色々な種類がある。そして、その種類によって描く魔方陣は異なる。

瞬間層移動や、荷物なども一緒に運びたい場合の魔法、自分以外の魔人を運ぶ移動魔法など、様々な種類がある。

普段は、普通に“層移動魔法”。

私が今から行うのも、それだ。

四一四

Transfer 3

四一四

D・あなたなしでも世界は廻る（後書き）

231007 20:25

E・自から星が散れば いいのに

05

『　　』　　『Transfer・3-』　　『　　』

一瞬で、辺りが光に包まれたかと思うと、其処の光景は全く違つて
いるものだった。

『着いたわね、3層目“アルカディウス”、』

この世界は全部で5つの層に分かれている。その中の3層目が此処
だ。そして、この大きな街“アルカディウス”は商売が盛んな街と
して有名である。その中心部に大きく聳え立つ屋敷。

『さあ、行きましょうか、』

其処が、七瀬財閥の屋敷である。

この星は、5つの層に分かれており、沢山の大陸に別れている。そして、その大陸 자체が一つの国にあたる。

そしてこの国は、国称“ルーヴアン（Louvain）”。町並みは西洋風であり、政治は王族が実権を握っている。他民族文化であり、色々な民族が集まっている。他国との交友は安定しており、政治も安定している。首都は“中央”^{セントラル}。恐らく、星一の大国だと言える。

七瀬家は“ルーヴアン”的“アルカディウス”に屋敷を立て、この国を舞台としているが、シーウェル家を始めとする世界貴族の中には、自分達の国を持つている所だつてある。

シーウェル家は自分の国を持つているが後に明かされることになるので、今の表記は伏せておこう。

虹彩と日向、シエルアにギルは、屋敷に向かつて歩く。街に入ると、街は活気に溢れており、長い期間あの道場に滞在していた二人にとっては懐かしさが込み上げて来るのだった。

「おばさんっ！」とにちわつ！――

「おや、田向君じゃない。帰つて来てたの？」

「うんっ」

「桃林檎、一つ、持つてくかい？」

「いいの？ 有難う！――」

「虹彩ちゃんにもあげよっ、」

『あ、有難う』

果実を売つてゐるおばさんに桃林檎を貰い、食べながら歩く。

因みに桃林檎とは、近くの林檎畠でよく取れる、所謂桃と林檎の合体作の事だ。味は良く、少しばかり酸味が利いてゐるが、非常に甘く、良く親しまれている。

此処の人達は皆、明るい人達ばかりで人当たりも良く、私が令嬢だからといって畏まらない。普通に話しかけて來るのだ。私はそんなこの街の人達が大好きだ。まるで、家族のようだ、

「あ、もう直ぐですね、」

『ええ。』

シエルアが指差した先には、橙色の大きな屋根が見えた。

「いらっしゃりです、『

屋敷の中に入り、使用人に部屋へと通された私。

暫く使っていない部屋だったが、使用人達のお陰で綺麗に掃除されている。

「お嬢様、帰つてらしたのですね」

『ええ。ちょっと、用があつて、』

そう言いながら、私専属のメイド、萩音はクローゼットを開ける。どうやら、着替えると言つ事らしい。確かに、今までの暑さの所為で汗を搔いていた。

私は、ハア、と溜息を付きながら近くのソファーに腰を掛けた。

新しい服がいくつがある。私が居ない間に、仕入れていたのか、気になつて問うてみた。

『萩、その服は?』

「客様が、お嬢様へといつ事で、置いてまいりました」

『客・・・?』

「はい。お嬢様が留守といつ事をお聞きになると、プレゼントを置いて帰つてしまわれましたが・・・、

国王様が、こうしゃいました

『ほ、本当なのッ！？鬼沙羅がッ！？』

「はー・・・。」

“華京院鬼沙羅”。読みは「かきょいん かれい」。この国のアツップを担い、国王である。

『そ、う・・・、国王が、』

「では、失礼致します」

そう言って部屋を出て行く萩。私は、床に並べられた可愛く数々のデザインの箱と、ソファやクローゼットに掛けられたワンピースやドレスなどの高級そうな流行の服に目を落とす。折角貰った事だし、着てみようと思い、赤いワンピースに手を伸ばすとメッセージカードが挿んであった。

ワンピースから田線を外し手もメッセージカードに伸ばす。だが、その動作は後少しの所で散った白い火花に遮られる。

『なッ！？結界！？』

時にこの世界、この国では手紙などに結界、所謂“鍵”が掛けてある場合がある。中身を他の者に見せたくない時にこの魔法を掛ける。そんなに中身を見られたくないのか鬼沙羅。私はそのメッセージカ

ードに手を翳した。

『読み手、七瀬虹彩、またの名をコイロ・シーウェル。魔法解除』

すると蒼い光が私を包んだ。只手紙読むだけなのに随分大掛かりな作業だな。それは問わないで頂きたい。派手好きなあの鬼沙羅の事だ。これも序の口に違いない。

そう考えていたついに、魔法解除という文字が浮かび上がる。この手の魔法は、書き手が読み手の指定をしてから送る為、読み手は簡単に魔法を解除できる。

『はあ、何でこんな。あいつはエスパーか』

貴女に話したい事があるの。

Ｔ・虹彩

貴女の邸に面つたのだけれど、貴女は留守だったらしい。

この手紙を見てるって事は、もう帰宅しているはず。

直ぐに宮殿へ向かいなさい。

あ、後、今日さつちに送った洋服も着てくれると嬉しいわ。

by・華京院鬼沙羅

私は貰った赤いワンピースを着て、仕度を始める。そして・・・、

『 もへ、今すぐつて何よ今すぐつて』

仕度を終えると、急いで屋敷を飛び出した。

「お、お嬢様！－何処へ御出ですか－？」

『決まつてんでしょ！－中央の宮殿よ。鬼沙羅の所！－』

向かうは、あの面影。

G・溺れよつよ、いま深海のきみの瞳に

屋敷を出て約20分。それはもう走り続けた。そして今も尚、走り続けている。息は所々續かなくなり、散り散りになつてゐるが、結構タフな方なので、まだまだ走る。

急げ、急げ。私は走りながらあのメッセージの意味について考えた。普通、こんなメッセージカードに鍵魔法なんて掛けるか。必ず理由があるはず。探し探し、分からぬ、探し。厳密な事をこれから私は告げるといふのか。ならばその厳密な事とは何だ。まさかバレたか。今に思い出すにもおぞましいあの事件。私と父さんが調べていたあの事件の真相。まだ答えには辿り着いていない。だが、調べられている事に勘付かれた、となると、こちらも不都合だ。どうにかしなければならない。だが、いくらなんでも王都に情報が行くのは早過ぎる。否、だがあの鬼沙羅の事だ。情報網が早いのにはこちらも承諾出来る。では何故だ。口封じか。殺す、事はまず無いと思うが。何故あのタイミングで私に手紙を遣した。

『ツはあ、はあつ、つ、着いた、ツ』

屋敷を出て約30分で着いた先は、取り分け巨大な城のよつな宮殿。赤と白の薔薇が咲き乱れる。まるで、不思議の国のアリスに出て来る赤の女王の城の様な。大きな薔薇と白鳥を作る門と、噴水、銅像、テラス。数々の創造品に目を奪われる。

⋮
A
l
i
c
e
i
n
W
o
n
d
e
r
l
a
n
d
⋮

通されたのは、温室のような密室間。数々の樹や草花に、小川をイメージした綺麗な水路。噴水もあり、更にはプール、滝、中心には白いソファにテーブル。テーブルの上には先程鬼沙羅の召使が用意したであらう、紅茶とお菓子が用意されていた。そして、反対側のソファには、鬼沙羅、国王が座っているのである。

「あら、こりひしゃい。・・・虹彩」

『人を緊急に呼び出しどいて何よ。何様よ』

「別に良いじゃない。貴女の疲労顔が見たかったのよね。レアよレア。それと、偉い立場なんだから仕方ないじゃない」

と、こんな会話が3分程続くのである。

すると珍しく鬼沙羅が話しきを切り出した。

「そろそろ本題に入らうぢやないの。
”は知つてゐかしら?”

『魔、聖大戦・・・?』

貴女、 “魔聖大戦

H・病は力スター・ドプリンのふりして囁く

“魔聖大戦”。その言葉が鬼沙羅の口から放たれた事には正直心底驚いたものだ。“魔聖大戦”について、知らない訳では無い。だが、逆にも幼い頃絵本で読んだ事がある位だ。こんな時にそんな無駄話をするつもりかコイツは。否、だがそうでも無いらしい。鬼沙羅の表情を伺えば真剣だ。

だが一応問うてみる。

『・・・こんな時にそんな無駄話するつもり?幾等貴女でも張り倒すわよ。』

「無駄話?それどんな冗談よ。何、知ってるのかと思つたわ。・・・・・・否、知つているはず。私が随分前に貴女に調査させたはずよ」

どういう事だ。私は知つているのか。随分前に調べた・・・?

消え掛かつた“魔聖大戦”という言葉と情報を頭の中で必死に探し荒らす。すると段々と人間とは思い出していくものだ。それは此方の世界の魔族も一緒である。段々とハッキリしてきた記憶を鮮明に繋ぎ直す。

「思い出した様ね。まあ良いわ。今日はその事について話がしたかったの」

アブソリュート・ディゲーム
魔聖大戦”^{アブソリュート・ディ}。それは、この世界で有名な神話に出て来る絶対願望
機。^{ゲーム}正式名称新約聖書、を巡つて選ばれた魔族達が殺しあう遊戯である。

新約聖書^{ノーヴム・テスマントウム}とは、持者の願いを叶える聖書の事である。手にした者の願いならどんな事でも実現出来る、奇跡だつて起こせるこの聖書は、何時からか“魔聖大戦”の賞品となつてしまつ。

選ばれし魔族達は、最終地点と呼ばれる幻島、“失われし理想郷”^{ロスト・オブ・エデン}に集い、戦闘可能な魔族が残り一人になるか、3ヶ月が過ぎるかがゲーム終了時^{ノーヴム・テスマントウム}となり、前者の方の残りの一人には次の“魔聖大戦”までの期間の新約聖書^{ノーヴム・テスマントウム}保持者、管理者の権利が与えられる。その管理者には最大三つまで奇跡を起こす力が与えられ、どんな願いでも叶えられるという。但し、願いを四以上叶えた場合、管理者の身体が新約聖書^{ノーヴム・テスマントウム}を体内に秘めておく事が難しくなり、狭間の門から姿を消すといつ。実際、そういう事例が確認されており、調査した結果、新約聖書^{ノーヴム・テスマントウム}は狭間の門と同じ物質から創られていることが判明された。

私は、この時は極秘任務として出た訳なので、一般の魔族は先程の私と同じ様に、絵本として出版された童話としてしか知らないが、それ以下の無知のどちらかに当てはまる。

まさか現実の話だつたなんて。

「良くもまあ、此処までこの短時間で思い出したものね。」

『そりやどうも、』

「そして、貴女に一つ、『魔聖大戦』の事について頼みがあつたのよ」

『だから私を此処に呼んだ、と?』

「ええ。・・・魔聖大戦は、普通7・8年置きに開催されるわ。そして、今年で43回目。・・・勘の鋭い貴女には、もう気付いて来ているんじゃ無いかしら?」

『私に、出場しろ、と言いたいのね?』

「流石。この国からも数々の実力者達が出席するわ。勿論、他の国からもね。・・・その出席権を与えた猛者の一人が、貴女なの。」

全く、無駄に緊張して来たこの思いは何処へ行つたんだ。

それに、『魔聖大戦』なんて、言って見れば只の戦争に過ぎない。戦争と言う事は殺し合い。殺すのは、仕事として戦争に狩り出た事もあつたので言葉に動じたりしなく、逆に手馴れしているものなの

で、血が騒ぐ。あ、悪い意味でだ。別に殺すのが楽しいとかそういうのじゃないから。其処は勘違いしないで頂きたい。

「もう、この時点では貴女の出場は公認されているの。まさかとは思うけど、出場破棄はしないわよね？」

「貴女がこの国について騒ぎ回っているのは情報として此方に入りあっているのよ。もう一度言つわ。

まさかとは思

うけど、出場破棄はしないわよね？」

二タリ、妖しく笑う鬼沙羅の微笑みが、今の私の記憶に鮮明に残つた。

H・病は力スタート♪コンのぶっしり壁(後書き)

あーもう鬼沙羅さん怖いですね。怖い怖い。

231107 16:30

I・嵐の中を君と駆けるよ　これは終わつへの追走

（まさかとは思つけど、出場破棄はしないわよね？）

「ぐくり。妖しく笑う鬼沙羅を田の前に、一筋の冷や汗が頬を伝つ。まさか、これ程までに調べ上げられていたなんて。思いも寄りぬ出来事と発せられた言葉に只私は息を呑む事しか出来なかつた。

追い討ちを掛けるような言動、これは正に、私に“出る”と告げているに相違無い。果たして、鬼沙羅にこんな頭はあつただろうか。だが今更考え方直したつて遅い。現実は、“Yes”という答えしか聞かないであろうな鬼沙羅と、“Yes”としか言えない状況に或る私だ。全く、正直こんな面倒臭い事この上極まりない事に首を突つ込みたく無かつた。その上、今度は殺し合いとまで来た。別に仕事でそういうのには慣れもあるし、私は負けない自身もあるので如何とも思ひはしないが、鬼沙羅の神経は如何にかなつてているのでは無いか、心配になつた。

ふ、と外に眼をやれば、先程とそう大して変わらない風景が窓から見える。華美でりながら、何処か清潔で、派手で。可愛らしい、という言葉が一番当てはまるであろうその庭に、溜息をつきそつとなるのを喉先寸前で止める。

『…………つ、はあ、…出場、すれば良いんじょ。』

替わりに口から出たのは、”Yes”といつ答えた。

「流石ね。貴女なら承諾してくれると思つてたわ」

自分がそつさせた癖に、と脳裏に苛立ちが積もる。

（誰の所為よ、誰の！）

「では、”ルーヴァン国首都政府・元帥”七瀬虹彩、及び、コイロ・シーウェル。貴殿を第43次魔聖大戦に出場する事を、此処に公認致す。」

決戦はこれから7日後。

最終地点と呼ばれる幻島、失われし理想郷でその究極の決闘劇は開始されるのであった。

ロスト・オブ・エデン

だが、何故私が選ばれたのだろうか。只、強者を選ぶだけなら私以外にもその目的に匹敵する相手は数多に居るだろうに。確かに鬼沙羅は「もう貴女の出場は公認済み」と言つた。最初から私が選ばれたという事は、何か理由があるはず。それが全くと言って分からない。この戦いに出生する魔族は、何かしら叶えたい望みがある。そしてその望みを叶えたいが為に、命懸けで戦うのが魔聖大戦。だが私には何かしら叶えたいというその願いが無い。・・・無い、と言つては嘘になるが、願いなら魔族にも欲はある。願い位何万もあるはずだ。だがそれが絶対に叶えないと強く願つて居る訳でも無い。私もその一人だ。なので、命懸けの殺し合いを勝ち抜いてまで、叶える願いが分からぬ。〃、この戦いに出生する理由が無い。

必死に思考と思考を繋ぎ、答えに辿り着こうとしている私の脳内。そんな脳の代わりに、時間は少しづつ進む。

タイムリミットも、刻一刻と、迫っていた。

(（ それでも ）のまま走つていけると信じてるんだ ）

J・眼球内を花火がスパーク

*

場所変わつて此処は“ボルケイノ・ヴィレッジ”跡地。破壊された直後よりは随分と益しになつたものの、やはりまだ瓦礫は残つているし、濛々と漂う嫌な臭いに、訪れた2人の少女達の内の一人、茶髪の少女が鼻を摘む。

「まさか、此処までやつてたなんて、・・・、」

だらし無く毀れた言葉が、被災の深い真情を物語る。眉をハの字に潜め、何処か悲しそうな表情だ。そして彼女は隣に居た金髪の少女の表情を黙つて伺つた。

茶髪の少女とは逆に、否、少しは同じ様な感情も持ち合わせているだろうが、蒼く燃え滾る様な蒼眼に強い意志を巡らせ、無表情で活気あつた村のザマを眺めていた。

「・・・少し、遅すぎたかもしれないわね・・・・・、」

堅く締められた唇の端を更に堅く締め、一瞬悲しそうな表情をした後、またいつもポーカーフェイスへと戻るのであった。

「うん、私達に情報が入つて来るのは早かつたはずなのに。もう少し早く動いていたら、ね。・・・ジユリア、」

茶髪の少女　　“清野サクラ”及び“サクラ・カーライト”は戻れない過去の自分に想いを馳せる。視立て17位の少女でストレートで艶のある長い茶髪を頭上高い位置で結い、輝く淡いライムグリーンの瞳に端整な顔立ち。

そんなサクラに名前を呼ばれた金髪の少女　　“ジユリア・クラウン”及び“優峰樹理亜”。彼女はサクラの呼びかけに小さく頷いた。ジユリアの髪は一本一本が柔らかく品のある綺麗な髪の毛であり、髪色は金髪。^{ブロンド}ウエーブの掛かってるその金髪は、光に当たる程輝きを帶びていた。そんな金髪に、蒼眼。

彼女達は今回の第43次魔聖大戦に出生する魔族の一二人でもある。

「私達の争い戦う決闘劇で勝ち残つた者に『えられる新約聖書の魔^{ノーザム・テスマメントウム}力を溜める為に必要なのは、生きた魔族の魂。それも大量な』

「そして、今回の標的にされたのが、此処、“ボルケイノ・ヴィレ

「ツジ”って事だね、」

「そりゃ。本当、何て事を仕出かしてくれてるのよ。こんななんじや、何の為に魔聖大戦を開催しているのか、全く分からないわ」

「命を天秤に掛けるなんて・・・、」

「これは、何としても勝ち進まないといけないわね」

「うん、」

墓の広がるこの地に堅く目を閉じ、一人の少女は強く意を決したの
だった。

「さてと、本題に入るとするが、」

*

ギン！鈍く嫌な音が響き渡る。此処は“ウォリアーテイル”1層目
のとある国の裏路地。

所々ハネている紫色の髪を赤いリボンでサイドに結っている。髪は
所々ハネ、余り手入れはされていない様だ。そして、瞳は綺麗な紅
色。

衣服と頬には返り血が少々付いていた。

「ちょっと、殺り過ぎたか、」

彼女は、魔聖大戦に出生する魔族の一人である。

「虹彩、お前も出生するのか。実は、アタシもなんだ」

行き成り襲つてきたであろう数名の不良共を蹴散らし殺つた後、浴

びた返り血を叩いた。

「さてと、アタシも、動き出さとするか

K・終わりだって始まりを待つている

キイ。ドアノブを廻せば木製のドアが声を上げる。薄暗い部屋にドア音が木靈した。木靈でしょうか、いいえ、誰でも。と言つのはこの際気にして置こう。

素足か。と思わせる位に音も無く忍び寄る影。革張りのソファに腰掛けた蜂蜜色の少女の直ぐ後ろに移動すると耳元で少女の名前を囁いた。カーテンが閉められ、真昼なのに日の入らない薄暗いこの部屋はバーの様だった。だが客も店員もマスターも居ない。要るのは金髪の少女と同じく先程入ってきた金銀髪の少女だけ。金髪の少女が座っている少女の先には同じ革張りのソファが置いてあり、テーブルには菓子とコーヒー紅茶などが置いてあつた。

この薄暗い部屋には少々刺激の強い程の輝かしい髪を持つた少女が要る。一本一本が丁寧に手入れされた美しいという文字では足りない位の丁度金と茶が混じつた絶妙な彩色の髪は、毛先が銀色化しており、グラデーションのようになつていて。そしてこの薄暗い部屋で良く光るルビーの様な、燃え滾る炎を意識した宝石の様な瞳。艶のある色白の肌。瞳を縁取るは、これまた長い睫毛。絶世の美少女であった。

薄い水色の細い縦ストライプの入つた半袖シャツには、大きな黒いボタンが三つと同じ色のリボンが一つ付いており、周りをフリルで飾られている。女性独特の気質を保つたシャツだった。そしてその上から黒いサスペンダーが伸びる。土台が可愛らしい模様の刺繡された3段フリルの上から灰色のスカートが止められており、何かと銀色の糸で刺繡がされてある。レースの付いた黒いニーハイソックスの上から灰色のブーツ。手には黒い腕上までの布手袋でファーが

あしらわれた高級そうな灰色と黒のポンチョらしき物を持っている。

今回は綺麗に整えられてはいるものの、頭上で編まれてはいないその髪は胸下まで下ろされていた。

改めて向かい側のソファに腰掛けると足を組んでテーブルのコーヒーカップを一口含み、ごくり。飲んだ。

「久しぶりだな。 七瀬虹彩。」

「・・・ノック位しなさいよ。」

虹彩の事を「七瀬虹彩」とフルネーム呼びをした彼女の名前は「冠羽珠琴」。及び「ミコト・ウォン・フォレストベルン」である。「冠羽」という苗字も早々居ないこのぶつ飛んだネーセンと、このキャラは「 fateシリーズ」の塊だという事には、あえて触れないで欲しい。

さて、話を戻そう。彼女はこの“第43次魔聖大戦”に出場する猛者の一人である。主な武器は針金細工。彼女の武器の源となる針金細工を数々の武器に変形させ、それを武器として扱う。主属性は炎、

光。副属性は天体系（月、星など空に浮かぶもの）、音楽系、花、
善。

「七瀬、あんな馬鹿げた遊戯ゲームに出ると聞いたけど。」

「馬鹿げた、とは何かしら？」

「惚けるな。情報屋に高値で聞いたんだから間違いない。」

「はあ、もう。容赦無いわね。」

「そう？ 七瀬程では無いこと思つけど？」

「あ、それと。」

聞いたわ。貴女、革命家側に付いたんだってね、

珠琴の瞳が、揺らぐ。まさか此処まで情報通が早いとは。敵という訳ではない。正直逆だ。だが流石七瀬だな、と恐れ入る。

話が、着々と進んでいく。最終地点に行くのは各地で潰しあい、人數が基準を突破した後。結構潰さなくてはならない。

円堂守。彼も同席するそつだ。嘗て伝説となりかけた男。消息不明

だつたらしいが。大人しく伝説になつていれば良いものを、魔聖大戦の出場権は円堂守へも送られたそうだ。

そして、松風天馬。革命家のスキルを持つており、文字通り魔聖大戦を終結させようとする。開催主催者側からしてみれば天敵のはずなのに、何故彼に出場権が渡されたのかは今だ謎。

この二人は常に最強クラスである。敵として戦う事になる以上、充分に警戒せねばならない相手だ。因みに、珠琴は松風天馬と同盟を結んでいる。

「他には、ジュリア・クラウン、サクラ・カーライト。・・・後、時空姉妹もだ」

「ときそらしまい？ 何よ、それ」

「知らないのか。姉・時空過去。妹・時空未来のコンビ名だ。特に妹の時空未来は、魔聖大戦最強スキル“神殺し”持ってるんだよ。」

「要するに、充分に警戒しなければいけない。」

「そ。」

これから拙戦になりそうな戦いに思いを馳せて、虹彩は紅茶を啜つた。

K・終わりだって始まりを待っている（後書き）

231215

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3474x/>

World End TinkerBell - 世界を忘れたティンカーベルの唄声は -
2011年12月15日22時55分発行